

彼の心を喜びと楽しみで満たしたい

はじめに

やまなみ工房は1986（昭和61）年、滋賀県甲賀市において開設され、その後1990（平成2）年、従来から行なっていた下請け中心の生産活動から、個性豊かに自分らしく生きる事を目的に、一人ひとりの思いやペースに沿ったさまざまな表現活動に取り組むようになった。これまで入所を希望された方をお断りした事はなく、開設当初3名だった利用者は現在83名となり、多機能型施設（生活介護・就労継続B型）として、個々の目的に応じた6つのグループに分かれ活動を行なっている。

（彼の心を喜びと楽しみで満たしたい）

障害の事、障害のある方々の実情など何も知らなかった私がやまなみ工房で働く機会をいただいたのは今から27年前、1989（平成元）年5月のことである。初めて目にしたやまなみは、安全で快適な空間とはほど遠い六畳二間の借家で、これまで漠然とイメージしていた福祉施設とは大きく異なるものであった。しかし利用者である彼らにとっては、自宅以外に初めて見つけた楽しい「居場所」であり、10名ほどの利用者は数台の長机で顔を寄せ合い、1つ1つに満たない内職仕事に毎日取り組んでいたのだ。地域の中で障害者に対する理解や適切な支援は今ほど得られず、就労することはもちろん社会の中で役割を与えられる事が困難な状況で唯一手にした内職は、「働きたい」、「お給料が欲しい」と目標をもって自発的に向える方にはとても大切な仕事であった。私たちはそうした利用者や家族の願いに応えるため、一般社会における就労を理想とし、わずかでも近づくよう、また工賃が少しでも増え経済的に自立する事をめざしていたのである。働くために必要な教育的で反復的な訓練と彼らの努力は次第に効果を表わし、毎月手にする給料は少しずつ増え始めた。しかし同時に大きな制限と制約が増え始めたのも事実である。私たちは、利用者の存在を一ひと括くりにし、いつしか支援するほう、されるほう、管理するほう、されるほうという上下関係を生み出し、個々の思いに耳を傾ける事をせず、私たちの「こうしなければいけない」、「こうあるべきだ」という概念や価値観、支援者の理想と一方的なシステムの中で彼らと向き合い、やまなみでは内職を頑張らなければならない、社会に適応できるようにならなければいけないという目に見えない規律を作ってしまったのである。本来私たちの役割はこれでいいのだろうか。そう考えるきっかけは1990（平成2）年の春、三井啓吾さんとの出会いだった。私たちは彼らの上に立ち、社会における有用無用の偏った価値感で、彼らの好きな事を奪い、本意ではない事を無理矢理させてはいけない。彼らには彼らの感じ方や考え方があり、やりたい事もある。希望を叶え、その人らしく過ごすことを尊重し、あるがままの彼らの心が喜びと楽しみで満たされ、それぞれの幸せに向う事が何よりも重要なのだ。私たちは三井さんに支援者として

最も大切な事に気づかされた。

(描きたいように描いてみよう。君は君らしく生きてみよう)

三井さんは限られた進路選択の中、自らの意志ではなく、関係者の働きかけにより入所を余儀なくされた印象が強かった。18歳になり養護学校高等部を卒業したとはいえ、全ての人が社会で働きたい、お給料が欲しいという目的を明確に持てる人ばかりではない。三井さんは彼の本意とは別にさまざまな事情でやまなみに通わなければならなかったのだ。初めて会う人たちの中で、目的を理解できぬまま内職を勧められ、集団に適應できるか、決められた時間の中でどれだけでできるか、支援者の偏った狭い視野と一方的な価値観の中で否定や肯定をくり返し、社会性や生産性に照らし成長や発達を探る。彼の目的や内面の豊かさに目を向けず、これほどまでに失礼なことがあるだろうか。私たちは彼に自発性がないと決めつけ、思いを伝える機会すら奪っていたのである。ある日彼が紙切れと鉛筆を手にもと落書きをしていた。描かれたその表現に対して、当時の私に魅力を感じとる力はなかった。しかし彼の表情と指先に漲るエネルギーに圧倒された。内職に向かう彼とはまるで別人である。彼と彼の指先から初めて感じた自発性であり、彼の満面の笑顔の前に、私はこれ以上に価値のある事などないと確信したのである。もちろん内職とは違い対価に結びつくものではない。社会の中で称賛を受けるものでもない。何かを描いた紙切れを、絵であるか、そもそもアートであるかどうかの発想すら私にはない。シンプルに彼が見せた自分自身のための行為と表情に心を揺さぶられただけなのである。施設にアートを取り入れるなどと考えたことなどなかった。素晴らしい作品を描いてほしいなどと考えたことなどなかった。目の前にいる彼自身が喜びを感じ、穏やかにそして夢中で向える事が欲しかったのだ。

(制約と制限の中で)

これまで目の前にあった内職は姿を消し、以前より自由を手に入れた彼に対し、私は喜んでくれるのではと好奇心に駆られ、さまざまな種類の素材を準備し彼に任せてみた。美術に関して知識もなければ興味もない私は、素材の使い方においても手出し口出しすることすらできない。今思えばその事も彼には良かったのだろう。なぜなら作業内容が変わった途端、指導されることや細かに干渉されること、行為に介入されることもなくなったからだ。たとえばあの時「これを描きなさい」「この色にしなさい」「今日は何枚描きなさい」「これは失敗だ」と、制約と制限の中で表現することを強要していたら、それは内職をしていた時と変わらず自由な活動と言えない。彼にとって表現は何が描けるか、何をどれだけ作れるか、描いたものに社会的・美術的価値があるかどうかではなく、自分の世界を築くことが重要なのである。私たちがその思いに逆らって、彼らの行為や作品が誰かの評価を得る事だけをめざすことや、その評価に左右されることがあってはならないのだ。たとえば組織の中で支援者が保身を優先させたり、自身の立場を危惧ぐし焦りに駆られたり、安易に流行やりを追従するようなことがあってはならない。私たちがぶれずに大切にしなければならない事は、一人ひとりの個性や自主性を重んじる事、それぞれの行為を尊重し、自らの思いからなる表現を肯定する事、芸術至上主義にならず、

その場にいる彼らが自分の目的に向かい成長を続け、豊かな生活を送る事なのである。

吉川秀昭さんは何事にも丁寧に取り組む。丁寧さは私たちの常識を遥かに超え、食事、着替え、乗車、すべてにおいて独特の時間を要した。彼は紙のサイズに関わらず、毎日小さな四角を1つ描いていた。午前午後合わせて3時間、2センチ四方の正方形。私は長い間、彼は1枚の紙に小さな四角を1つしか描けない人だと思い込んでいたのである。しかしある朝、本来ならきれいに片づけられているはずの机に前日に描いた紙がそのまま残っていたのだ。理由は私が前日の出張で部屋の片付けが出来なかったためである。彼は躊躇うことなく前日描いた四角の横に新しい四角を描き始めた。私は単純に紙を節約する意味で同じ紙を続けて手元に置く事にした。数日後、続けて描き続ける事ができる彼の紙に描かれているものは、小さな四角ではなく、人の目と鼻と口である事がわかった。彼は小さな四角しか描けない人ではなく、片方の目を3時間かけて描く人だったのだ。こちらが設定した作業時間の中でおよそ誰もが一日に一枚の作品に取り組み完成するだろうと言う一方的な見方が、彼の必要な時間を奪い、四角しか描けない人であると決めつけていたのだ。達成感を遮られる事から開放された彼が一枚の絵に要した時間は結局、2年半。その作品は現在も国内外で高い評価を受けている。

(待つことで見えた大切なこと)

私はすべての利用者にその人にしかない豊かな表現と可能性があることと確信している。目の前の利用者に才能があるか否か、活動を好むか好まないか等、支援者が簡単に判断や選別する事で機会を奪う事は絶対にすべきではない。彼らは活動に向かうまでの時間や方法が一人ひとり違うだけなのである。

大原菜穂子さんが粘土に触り出したのは、やまなみに来て3年が経とうとしている時だった。入所間もない彼女に粘土を渡した時は、まったく興味を示さず、むしろ嫌悪感を態度で表わすほどだった。私たちは彼女がどうしたら粘土を好きになるかばかりを考えさまざまな工夫をした。しかし状況は好転するどころかストレスは増しているようであった。私たちは彼女に粘土や絵を描くよう促すことをやめ、自由に振る舞える状況を整えた。そしてどうすれば彼女が一日穏やかに過ごせるのかを考えたのだ。一日の流れや、誰とどこでどのように過ごす方がいいのか。言葉でのコミュニケーションが苦手な彼女だが、さまざまな場所に出かけ、多くの経験と時間を共有する中で、関係は深まり、彼女の表情の中に今までにない安心感が宿っている事が伺えはじめた。安心できる時間と空間の中で誰に指示される事もなく、自ら粘土を丸めはじめたあの日から25年。彼女が例外なのではなく彼らの中には、手にした瞬間から目の前の粘土に没頭し表現に向かう人もいれば、3年後、10年後に始める人もいる。あの日、一週間や一か月で大原さんには才能がないと表現の機会を奪っていたら、今日の彼女の輝きと幸せは経験されることはなく、彼女は虐げられた別の人生を歩んでいたのかもしれない。彼女は私たちに早々に答えや結果を求めず「待つ」ことの大切さと、表現活動には互いの人間関係や信頼関係が重要であることを教えてくれた。ありのままの自分が認められ大切にされる安心感が生まれることで初めて表現活動に向かえるのだ。したくない日も当然ある。毎日同じことをくり返し、日課や作業として取り組むのでもなく、誰かに強要されたからでもない。にこやかにほほ笑み、作りたい時に作りたい数だけを

作る。彼女の手から生まれた人形は既に 3 万体を超えた。

(豊かな経験と環境から生まれた表現)

山際正己さんがやまなみで粘土を初めて触った時、彼は瞬く間にお皿や箸置きを大量に作った。独特の世界観を持つ彼の表現とは思えず私は少し裏切られた気持ちになった。粘土とは本来、自分の思いのままに形が変わる自由な素材だ。指示された訳でもなくお皿を作り始めたのは、おそらく第三者から粘土とはこうするものだという概念を過去に植え付けられたのではないだろうか。支援者は本来彼らにさまざまな材料や機会を届け、できたものや過ごした時間に笑顔で頷くために存在するのではないだろうか。間違っても「何かを作りなさい」と言うために彼らに寄り添うわけではないのだ。彼が嬉しそうな表情で積極的に粘土に向かう姿勢は凄まじいものであった。たとえば見通しがいい中では、一時的にお皿など同じものを作る事で精神的な安定が得られる人もいるかもしれない。しかし彼が実用的で売れる物を作るために粘土に向き合うのではなく、表現に彼らしさが宿る事を私たちは期待した。今彼はさまざまな動物や人をモチーフに独特の土人形を作る。表現するものはすべて彼自身が生活の中で目にし、感じたものばかりだ。彼の素直な表現や作りたい思いを引き出して形にするために、私たちは机上でどうすれば作品が作れるかを考えるのではなく、彼らとともにさまざまなものに出会い、感じる豊かな日常生活と経験することが必要であったのだ。山際さんにとって制作することを作業と捉えることなく、生活の中の自発的な行為として、やりたいときに自由に粘土に向き合える環境は、「その人らしさ」の尊重であり、真の自立に向かう大切な関わりである。もはや彼の作り出したものの中には間違いも失敗もない。誰にも歪められることのない表現を存分に楽しんでいる彼は今とても穏やかに過ごしている。

(彼女が彼女であるために)

彼女の集中力は素晴らしい。しかし穏やかに落ち着ける環境がなければ、その集中力も表現も生まれる事はなかっただろうし、瞬く間に崩壊するだろう。河合由美子さんは 18 年間、布に「まる」を縫い続ける。やまなみには元気な声で関わりを求める彼女の声我每天響く。しかし彼女が席に着きいったん刺繍が始まると、あたりは次第に静かになり心地良い空気が周りを包む。そして先程までの元気な彼女とは違う、静寂で穏やかな表情を浮かべる

彼女の手は一定のリズムで迷いなく動き続ける。

河合さんは今、広く大きい部屋で一人過ごす。決して孤独が好きなわけではない。自分から誰かに会いたいとき、話をしたいときは自らその場所に向かい納得するまで気持ちを満たす。みんなの事が大好きである。しかし集団の中で取り組んでいた時は不安定になり、落ち着いて刺繍に向かう事ができなかった。気になる事は人によって違う。施設の都合やシステム、集団のルールにすべてを当てはめると、彼らの本意や個性までも見えなくしてしまう。作業開始と同時に活動するのが苦手な人、特定の人声や存在が気になる人、午前中し

かしない人、昼休みにしかしない人、春から夏にしかしない人、個々の大切な「つもり」はさまざまである。彼女は刺繍ができない人ではなく、落ちついて刺繍ができる環境がなかった人なのだ。私たちは彼らを組織的な活動グループや集団という一括りにした中に無理に引き込まず、個々の「こうしたい」「こうしなければならない」という特別な思いを最大限可能にすることが重要である。どんなに設備が整い、画材があってもそれだけでは意味がないのだ。施設の体裁よりも利用者一人ひとりが一日穏やかに健康的に過ごせるよう愛情と工夫が込められた人的環境と物的環境がなければならない。

岡元俊雄さんは一人で過ごせる部屋で大好きな音楽を大音量で聴き、割り箸と墨汁を使い床に寝転びながら肘をついて絵を描く。もし彼に「椅子に座って描きなさい」と教育的に指示し、「筆をしっかりと持って描きなさい」「みんなと一緒にの部屋でやりなさい」などと押し付けていれば、一見行儀良く振る舞えるようになっていたかもしれない。しかしそれと引き替えに、今も絵に向かい表現することはなかったのではないだろうか。私たちはその人の好みや特徴を的確に見極める事が役割である。自由に使える時間と場所、素材は、誰かの指図を受けることなく岡元さんが選び、思うように使えばいいのだ。私たちは決して教える立場ではなく常に対等であることを忘れてはならない。物理的に困難な事や言葉で思いを伝える事が苦手であっても、彼らは素晴らしい表現者であると同時に人間性あふれる一人の人格者なのである。生きる中にある美しい表現やまなみ工房は画家や陶芸家養成所でもなければ、そうした表現活動に長けている障害のある人が通う場所ではない。まなみ工房はすべての利用者が健やかに穏やかに過ごす場所であり、そのために日常の健康管理、声掛け、行事等を行ない、お互いの目的や目標に向かうことを大切にしている場所である。

中には「何もしたくない」、「頑張りたくない」と言う人も当然いるだろうし、そうした思いを尊重し過ごす事も大切だと考える。この人はアートに無縁だと一方的に決めつける事もなければ、機会を奪う事も断じてない。誰もが自分自身の世界を持ち表現している。近年、陶芸や絵画が評価されアートとして紹介されることもあるが、けして芸術至上主義や金銭的価値で彼らの行為に優劣をつける事はない。私たちが見て価値がわかる、わからないや有用無用ではなく、その人の行為や作りだした物に対し敬意をもって大切にすることが重要である。

酒井美穂子さんと出会い 19 年が過ぎた。彼女はこれまで粘土をしたことも絵を描いた事もない。それはこれまで一途に一つの行為を続けているからである。彼女は歩く時、食事中、時にはお風呂に入る時でさえ、どこに居ようと誰としようと深い眠りについた時以外、片時も即席麺「サッポロ一番しょうゆ味」を離さない。理由は誰にもわからないが、彼女にとって無意味でない事は確かだ。「サッポロ一番しょうゆ味」。無意識に形成された私たちの価値観や偏った常識に照らせば、それは簡単に調理し食べるためだけのものである。彼女は自ら語る事はしない。しかし私たちは彼女から大切な事を学んだのだ。「あなたはありのままのあなたでいいのだ」、「あなたの価値観に正直でいいのだ」と。

常に手に持つことで劣化する即席麺は 1 年に約 350 袋を必要とし、これまで手にした数は累計で 7,500 個を超えた。彼女が手にした後のサッポロ一番は、社会的価値や称賛からは無関係であ

ろう。美術館でアートとして評価を受ける事もない。しかし他人の評価が無ければ無用であるわけではない。自らの強い意志で表現し続ける行為は何より美しいのである。生き方を肯定され認められる事の大切さ。彼女の一途な表現と残された即席麺は私たちやまなみ工房の宝であり誇りである。

(すべては幸せを感じるため)

私たち支援者は自身の概念を通し彼らと接するのではなく、また福祉やアートという偏った枠組みの中で行為や表現を見るのではなく、彼らの独特の発想と価値観に常に寄り添うことが求められる。私たちが目指しているのは作品に対する芸術的評価の高まりだけではない。ましてやその事により対価を受け取る事だけを重要としている訳でもない。全ては彼等と、彼等の表現に対する尊厳である。

日々の営みの中で気づいた事、それは一人ひとり自らに価値があるという事。彼らが喜びで満たされ真剣に向えるものが今ここにあるのか。その事が存在する日常の中におかれてこそ、生きる喜び、表現する喜びが生まれるのではないだろうか。

やまなみ工房には3つの自慢がある。1つは環境である。どうすれば一人ひとりが穏やかに過ごせるかを大切に、彼らが主体的にしたい事を見つけ取り組めるよう工夫された自由な時間と空間がある。2つ目は毎日楽しみの持てるどこよりも美味しいと思える給食である。そして3つ目はスタッフの人間性である。感受性豊かで個性溢れるスタッフは無償の愛で利用者を何より大切にする。スタッフと過ごす彼らは笑顔だ。スタッフの存在があるからこそ利用者は翌朝もやまなみに通う。芸術活動について専門的な指導や評価をすることはできない。しかしやまなみ工房のスタッフは利用者の心からの思いに対し絶対に応える覚悟がある。そして誰よりも彼らの事、彼らから生まれる表現のすべてを大切にする。そうしたスタッフの真心や情熱が伝わるからこそ、彼らの表現が生まれるのではないだろうか。優しい眼差し、美しい言葉と美しい心、どんな小さな事も励まされ、ありのままが認められる事で深く結ばれた強い信頼関係。それがなければ彼らの真の表現は生まれる事はなかつたろう。

彼らを絶え間なく別の何かに変えようとする社会において、目の前の彼らに一方的な抑制をかける事をせず、制約と制限を与える全ての事を取り除き、彼らが輝きを放ち続けられる環境を整える。

これからも誇るべきスタッフと共に、一人ひとりの幸せと可能性が無限に広がる事。健康で自分らしく伸び伸びと、個性豊かに過ごせるやまなみ工房でありたい。